



国際交流は相互の関係

山 瀬 孝

(株式会社ジェック経営コンサルタント 取締役社長)

東日本大震災に対する台湾からの義援金が200億円を超えた。日本政府は慌てるように日台交流を活発化させている。平成27年秋富山県の自治体と一緒に台湾からのインバウンド誘致の営業のため台湾の旅行社を訪ねた時の話である。旅行社との会話の中で東日本大震災に対する義援金の話題になると台湾人社長が言うには「あれは日本人が日本に送ったものです」とのこと。俄かにどういう意味か分からなかった。詳細はこうである。戦前に日本の教育を受けた台湾人は今なお、日本人としての心を持ち、日本に対する思いを持っていると言う。その日本から恩恵を受けた台湾人が台湾経済を担っている。だから、日本人（本当は台湾人だが）が日本に義援金を送ったと言う表現になった。真実は別としてその話は私たち日本人にとって衝撃であり、心温まる話であった。

しかし、その後の会話で、「今、台湾経済は世代交代にある。これからの台湾経済を担うのは日本人ではなく、台湾人である」と。「従って、観光に関して、日本人はもっと台湾に来なければならない」と提案を受けた。訪日台湾人は2015年360万人、中国500万人、韓国400万人に次ぎ第3位である。人口割合（台湾人口2,300万人）で考えれば断トツの1位であり、10人に1.5人の割合で訪日した計算になる。それに対し、訪日日本人は160万人である。台湾を走る自動車の日本車比率は90%を超える。この状態が長く続くことは無いと思う。

富山県への台湾観光客は年間10万人を超える。その逆はどうだろうか。富山県内の各自治体では台湾との交流を活発化させている。弊社もそ

の支援をする一方で微力ではあるが、今年7月に魚津市と連携し魚津駅の店舗(ミラマルシェ)で台湾から直接マンゴーを仕入れ、台湾マンゴーフェアを開催し好評を得た。来店された皆さんは「こんな安くて甘いマンゴーは無い」と台湾のおいしさを味わうことが出来た。これからの国際相互交流は立山黒部などの観光資源だけに頼ることなく、文化交流、物産交流への進化出来れば、未来に繋がる持続発展性ある国際交流・関係構築に繋がるのではないだろうか。そんなことを台湾の友人達と話をしながら、会話を弾ませている。

昨年6月に経営・CSR委員会で高山市の國島市長をお訪ねした。特急ひだ号にはびっくりするぐらい外国人が乗っていた。その後、気になって観ていると特急だけではなく、普通列車にも外国人が多く乗っている。高山市街は外国人で溢れかえっている。いよいよ、富山県も国際化の幕開けと行きたいものである。そのためには国際関係は相互関係という基本を大切にしてい、私たち自身も積極的に外国に出かけ、台湾、中国、韓国そして、東南アジア、世界の人たちとの交流を活発化したいものである。幸い富山空港には台湾、中国、韓国に直行便がある。羽田空港を経由すれば東南アジアをはじめ世界中に道は広がる。世界は成長真っ只中である。さあ、世界へ出かけよう。異文化との交流が日本、富山県のあらたな成長ヒントをプレゼントしてくれるかもしれない。

(次号は日本銀行富山事務所 事務所長の
武田英俊 様です。)